

ジャポニスム その領域と研究史

稲賀繁美

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学



エミール・ガレ
鯉文双魚形花瓶

1879-1889年

高さ：37.8cm

幅：20.3cm

奥行き：12.3cm

北澤美術館蔵

鯉のモチーフ葛飾北斎『北斎漫画』
13編「魚濫観世音」図より引用

ジャポニスムの濫觴と先陣争い

Japonismeという言葉はフランスの批評家、フィリップ・ビュルティの発案とされ、十九世紀後半にフランスを中心に欧米で広がった「日本美術愛好趣味」のことを指す。それに先立つて、詩人シャルル・ボードレールがjaponaiserieという新語を発明した形跡もある。こちらには、いささか自嘲の意味を込めて、日本愛好者を揶揄している語調が感じられる。おおむねこの日本美術愛好癖は、修好条約後、一八六〇年代からの流行とみてよいようだ。一八七八年のパリ万国博覧会にその頂点を迎えるとの回顧もなされる。それは先行する東洋趣味(オリエンタリズム)と、二十世紀初頭からの未開主義(プリミティヴィズム)との間に挟まれた現象であり、欧米の世界制覇に伴う異国趣味だった。

だが流行現象が顕著となれば、我こそはその先駆と名乗りを上げる輩も出現する。陶芸家・版画家として、印象派の周囲に居たフェリックス・ブラックモンが、輸入品の箱に詰められていた日本版画に最初に目を付けたのは自分だとの証言を残すのは、一八九七年。これに對抗してか、『歌麿』(二八九三)、『北斎』(二八九六)の著者、最晩年のエドモン・ド・ゴンクールは、自分たち兄弟はもつと早くに、オランダでシーボルトの蒐集に『北斎漫画』を発見していたのだ、と主張する。一番乗りの決定は、結局、無理な相談だろう。

ジャポニスム学術研究の萌芽時代

このジャポニスム現象に関する学術的研究の萌芽時代は、一九七〇年代とみてよからうか。当時はもっぱら「浮世絵と印象派」、いかに日本の浮世絵が西洋の近代絵画を代表する印象派に「影響」を与えたか、の検証が主流をなし、同時に日本美学の国際的な優秀性を顕揚する。一九七〇年の大阪万国博覧会の成功を受け、日本の経済的な国際進出とも符合した動向だった。今にしてみれば、そうも回顧できようが、それならば、逆に疑問も出てくる。そもそもいつ頃、なぜジャポニスム現象は終息し、その後なぜ久しいあいだ、日本国民は、その実態を等閑視し、ほぼ忘却してしまっていたのか？

まずジャポニスムの終息時期を確認しよう。どうやら日露戦争を終えた頃から、欧米の愛好家や芸術家たちの熱狂的な日本趣味は、急速に下火に向かう。その背景には、もつとも直接的には、中心的な役割を果たした画商たちの死去、それに伴う商品供給の払底が推測できる。パリを中心に活躍した画商、林忠正は、一九〇〇年のパリ万国博覧会の現地事務局長の重責を果たすが、ほどなく病を得、帰国した日本で一九〇五年に没する。その林と商売敵でもあったS・ビングは、日本美術商から世紀末には足を洗い、今度はアール・ヌーヴォーの立役者となるが、彼もまた一九〇六年には死去している。



シャルル・ボードレール肖像写真
ナダール撮影

© Ministère de la Culture - Médiathèque du Patrimoine, Dist. RMN - Grand Palais / Atelier de Nadar / distributed by AMF



フィリップ・ビュルティ肖像写真
エティエンヌ・カルジャ撮影
フランス国立図書館

Bibliothèque Nationale de France, Paris

美術市場の変貌

だが同時に水面下では、より長い周期で、美術市場にも変化が生じていた。一八六二年のロンドン世界見本市（と呼んだ方が正確だろう）では、初代駐日公使のラザフォード・オールコックが自らの収集品を展示して「日本」部を演出した。幕府外交団の一員、淵辺徳藏などは、そのグラクタだらけの展示に赤面している。つづく一八六七年のパリ万国博覧会では、薩摩藩、肥前藩に幕府と入り乱れての展示となったが、明治維新を経過した一八七三年のウィーン万国博覧会で、新興国・日本は、ようやく統一した展示に漕ぎ着ける。この時期には殖産興業が謳われ、関税障壁の下、輸出促進のため、起立工商会社といった半官・半民の組織が結成された。若き日の林忠正もその派遣員のひとりである。こうした事業からも分かるように、この時期の日本輸出製品は、ほぼ同時代の陶磁器や青銅器、絹織物さらには七宝製品などが中心だった。とりわけ扇子や団扇は、信じられない数量で輸出されている。いわゆる浮世絵版画も、そうした商品のひとつだった。

しかしながら、同時代の手工業産品は、美術市場の要請とは必ずしも合致しない。初期には『北斎漫画』に熱狂した芸術家たちのみならず、日本美術愛好者たちは、少しずつ、古い時代の由緒ある遺品に関心を移してゆく。ちょうど折よく、大名家や寺社仏閣は、経済的没落や廃仏

毀釈に伴って、古美術と目される家具や宝物を放出するようになる。八〇年代にはパリで龍池会が日本美術縦覧会を二度催すが、不況もあって失敗に終わる。もはや同時代の輸出用工芸品だけでは、顧客の欲心を引くには不十分だった。

趣味の転換と発展… 輸出用磁器から茶陶趣味へ

どこからこうした変化が発生したのか。筆者は、一八七六年のフィラデルフィア博覧会、一八七八年のパリ博覧会あたりに、ひとつの潮目があったのではないかと推測している。陶磁器に関していえば、このあたりで日本側組織者は、方針を刷新している。それまでは、輸出用の磁器、有田や薩摩を中心とした、入念な色絵の絵付けに透明な釉薬を施した、すべすべと艶やかで形態も整った新作が中心だった。だが、欧米側の顧客は、早くも輸出商品に飽きはじめていた。自国でもセーヴルやオートウイユの製陶工場で、地元の顧客の趣味に合致した日本趣味の食卓セットも焼かれるようになっていた。

市場の動向に気付いたのか、日本側もこれ以降、伊賀や古瀬戸、備前や唐津の茶陶も、積極的に海外に持ち出すようになる。くすんだ色調に歪な形態を帯び、不規則な焼成や自然釉が垂れた景色、織豊政権から江戸初期の古物、あるいは後代の写しである。もちろん一般の裕福な購買層は、従来どおり輸出用の磁器も愛好した。



ラザフォード・オールコック肖像写真
1876-84年頃

画像典拠：Rutherford Alcock, Lock & Whitfield woodburytype, 1876-84



フェリックス・ブラクモン肖像写真

エミール・クルタン撮影

1868-1870年頃

リモージュ、アヴィランド社所蔵

画像典拠：Félix Bracquemond et les arts décoratifs. Du japonisme à l'Art nouveau, RMN, 2005

とはいえ真葛焼の宮川香山や板谷波山などの超絶技巧への人気にも七〇年代末には陰りが指す。そしてそれとは一線を画した骨董市場が、着実に形成されてゆく。蜷川式胤の『観古図説』が欧米識者たちの指南役となる。

浮世絵への興味にも、同様な展開が見てとれる。通の趣味人たちは、明治期の「末期」浮世絵や広重、北斎の垂流による量産品ばかりではなく、時代を遡り、歌麿や清長、栄之さらには春信、春画に加えて「初期」の肉筆にすら視野を広げてゆく。九〇年代を迎えると、北米の収集家が財力にものを言わせ、欧州の売り立てで、法外といつてよい値を付けて、逸品を凌ぐてゆくこととなる。今や『鮑取り』といった歌麿の名品など、自分たちにはとても手がでない、と晩年のゴンクールは、愛好者仲間にも嘆いてみせる。

一九〇〇年のパリ万国博覧会はまた、日本政府が、初めての公式の日本美術史 *Histoire de l'art du Japon* をフランス語で刊行し、国宝に指定された仏像彫刻を含む名品を古美術会場に陳列した。それまで未知だった飛鳥時代以来の古代仏教美術の出現は、識者たちを驚かすには十分だった。だが、それはまた骨董趣味、愛好家による熱狂の時代の終わりを告げていた。辛亥革命期になると、新奇な骨董趣味は中国へと目標を転じる。天心こと岡倉寛三も、ボストン美術館のために中国で買い付けに奔走する。

『平治物語絵巻』や『吉備大納言絵巻』の流出事件を経て、第一次大戦後の日本は、文化財の

海外流出に対して、慎重かつ神経質になってゆく。二束三文の浮世絵を海外で売り捌いた林忠正も、没後には日本の貴重な版画遺産を国外に流出させた張本人として国賊に近い扱いを受ける。ジャポニスム現象は、日本人にとって、栄光の物語から、屈辱の歴史へと変貌した。これとは対照的に、一九三六年にロンドンで展示された中国故宮の秘宝展は、現代中国の栄誉を担った。他方一九三九年、オリンピックに好機を捉えたベルリン日本古美術展は、敗戦後日本では、ナチスへの加担と看做され、封印された。

装飾工芸の復権… ジャポニスム研究、最近のあらたな展開

一九七〇年代に勃興するジャポニスムの学術的研究は、一九八九年にパリと東京で開催された大規模な展覧会でひとつの頂点を迎える。「浮世絵と印象派」中心史観は、ポスト・モダンの時代に「装飾美術の刷新」へと衣替えした、と評してよからうか。油彩絵画中心の従来の美術史は、過去の「近代主義」の遺物へと急速に色褪せ、それに替わって、従来、装飾美術或いは応用美術として、劣位の範疇に甘んじてきた工芸の復権が、日程表に登ってくる。それは現代美術界の「絵画離れ」の兆候とも連動している。

この変化を象徴する事績をひとつ取り上げたい。一九八七年にNHKの企画で『琳派海を渡



ロジェ・マルクス肖像写真
エミール・マルクス撮影
1887年頃
ロレーヌ美術館蔵

© Musée Lorrain, Nancy



エミール・ガレ肖像写真
1895年頃
個人蔵



ANTIQUES MARY'S GALLERY

OPEN AM11:00~PM7:00

定休日:水曜日 営業日:木・金・土・日曜日

★アポイントのみ月・火曜日

URL : <http://www.gallery-marys.com>

E-mail : antique@gallery-marys.com

お手持ちの美術品、宝石、
高価買い入れ致します。



本店

〒561-0851 大阪府豊中市服部元町2-2-10-1F

TEL 06-6868-1532 FAX 06-6868-1533

駅前店 (阪急服部天神駅すぐ)

〒561-0851 大阪府豊中市服部元町1-1-6

TEL&FAX 06-6335-7877



『が、番組とともに刊行されている。ここで加藤周一は、琳派に注目し、その「美学が、いくら誇張していえば、世紀末の『アール・ヌーヴォー』に化けたのである」と冒頭に宣言する。だがこの段階では、琳派からアール・ヌーヴォーへの実証的な系譜は、まだほとんど立証されていない。点としての現象を結ぶ線が不明だった。ところがその後四半世紀のあいだに、この装飾芸術史の流れが、フランス十九世紀後半の大変動、産業史・美術工芸行政史変貌の核心をなすことが、立証されるに至っている。

最初の『日本美術』(二八八三)を著述したルイ・ゴンスは、「光琳」の装飾美学を賞賛したが、装飾美術中央連合でも重鎮を務めた批評家。その友人のテオドル・デュレは初期の日本旅行者であり、日本美術に印象主義の極致を認める一方、モネの画業をいち早く日本美学の名で絶賛した人物。ゴンス垂涎の抱一の絵手本は、オートウイユのアヴィラン工房の所有物だったことが判明しており、この日本趣味陶磁製造と競合しつつ、ナンシーのエミール・ガレも頭角を現す。ガレと同郷のロジェ・マルクスは、ビングの月刊雑誌『芸術の日本』の最終号に、「日本美術の欧州への影響」を摘要した人物だ。日本趣味は、ルネサンス期における古代復活に匹敵する事件だった。そう主張する彼は、美術行政官として、一八八九年、一九〇〇年のパリ万国博覧会で、工芸の地位向上に尽力し、最晩年にはクレマンソーの脇で、モネの大装飾壁画、睡蓮の連作をオランジュリー美術館に据え付ける「裏方」の一人ともなる。そこには従来の官展派美術アカデミーの専横に対抗する、自由主義共和派の美術政策が如実に反映していた。装飾による生活の刷新——。この理念に忠実に、一九二五年のアール・デコ展で、これまで半世紀にわたる日本美学受容の教訓を汲み、その衣鉢を継いだのが、次世代のルネ・ラリックだった。

(いなが・しげみ)



ルネ・ラリック肖像写真

1903年

エミール・ビーペール撮影

© RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF